

# 「イーゴリ遠征物語」における人間像

中 村 喜 和

*Le style est l'homme même.*—Comte du Buffon

## I 作品に描かれたイーゴリ

「イーゴリ遠征物語」において最も注目すべきことは、ここで作者の描こうとしたのがイーゴリの遠征ではなかったということである。この作品をまさに文学として成立せしめているのはこの事実にはかならない。

一方、イーゴリの遠征が「イーゴリ遠征物語」において、諸年代記の記述にはみられぬ迫真性をもって描かれていることも真実である。これがこの作品を文学として成立せしめているもうひとつの理由である。

1185年の春、南ロシアの諸侯のひとりイーゴリ・スヴァトスラヴィチは当時南と東のステップ地帯からキーエフ・ロシアをおびやかしていたトルコ系の遊牧民族ポーロヴェツにたいして遠征をおこなった。これは結局、イーゴリとかれにしたがって出陣した3人の侯がすべて捕われるという大敗北におわるが、この遠征はキーエフ年代記とスーズダリ年代記に記録され、また「イーゴリ遠征物語」の素材となった。

これらの作品はほとんど同時に、かつ相互に関連なく書かれたものであるが、事件の描き方はみないちじろしくことになっている。それぞれの特質はなканずく主人公の取扱いのなかに最もよくあらわれている。

「イーゴリ遠征物語」に描かれた主人公イーゴリの人間像を特徴づけるため、年代記のイーゴリ像との比較からはじめよう。比較において第一に気づかれることは前者における主人公の世俗的性格である。キーエフ年代記に描かれるイーゴリは他の善良なる侯とおなじく、たえず念頭から神を去らせぬ侯である。ロシア最古の年代記である原初年代記(11～12世紀)は、とくにその前半において、異教時代の侯たちの武勲を簡潔なスタイルで描き出しているが、それ以後の年代記では作者の視界は狭くなり、個性的な魅力は失われ、キリスト教的な世界観と教訓的性格だけがあらわになる。

イーゴリの出陣後まもなく日蝕がおこった。キーエフ年代記によれば、不吉な前兆におびえる部下にむかってイーゴリは言う。

《兄弟よ、親兵たちよ、神の秘密はだれも知らぬ。しかして前兆のつくり手は神であり、また全世界のつくり手も神である。しかして神がわれらに益をあたえるため、もしくはわれらに害を加えるため、何をなすかは、われらはのちに知るであろう。》<sup>1)</sup>

1) Лебедев, В., ред.: *Древнерусские Летописи*, Academia, М.—Л. 1936, стр. 231. なおここでは除村吉太郎氏の日本語訳を参照させていただいた。(「ロシア年代記」, 弘文堂書房 1946<sup>a</sup>, 475ページ)。

緒戦の勝利をイーゴリはつぎのように受けとる。

《いま神はおのれの方によってこれらの仇敵に敗北を、またわれらには名誉と栄光をあたえた。》<sup>1)</sup>  
翌日の敗北はかれにとって神から下された罰であった。

《われは神にたいする罪悪を、多くの殺人と流血をキリスト教徒の国〔ロシア〕においておこなったことを、……思い出した。》<sup>2)</sup>

これがキーエフ年代記の作者（正確にいえば、作者のひとり）の眼に映じたイーゴリ、いやむしろかれのつくり出したイーゴリ像である。

イーゴリの遠征を記録しているもうひとつの年代記、スーズダリ年代記は東北ロシアで書かれたものであり、一般にイーゴリの属する侯統に冷淡な態度を示している。ここではイーゴリは敬けんなるクリスチャンではなく、ひとりの野心家・冒険者としてあらわれる。イーゴリは出陣にあたって、

《われらは侯ではないか。しからば世の賞賛を得よう。》<sup>3)</sup>

と述べ、最初の勝利のあとは

《〔イーゴリ軍は〕三日のあいだうかれたのしみつつすごして、言った。「……われらはドンまで敵を追い、われらの祖父が足を踏み入れたことのない地まで攻め寄せ、栄光と名誉を得よう」と。彼らは神のみ心を知らなかったのだ。》<sup>3)</sup>

ここではイーゴリは神をおそれぬ傲慢不遜な人物として描かれている。

「遠征物語」において主人公は年代記と全く別人の姿をもってあらわれる。かれは神についていささかも思いをめぐらぬ武将である。また一方、「神のみ心を知らぬ」暴将でもない。日蝕にさいして、イーゴリは言う。

《「兄弟よ、そして親兵たちよ。討死するは捕われるにまさる。いざ兄弟よ、脚速き馬にうち乗って水青きドンを見にゆこう」侯の心にはげしい望みがわき、大いなるドンの水を味わう願いは天のしるしを彼の念頭から去らせてしまった。》(Editio princeps, p.5~6)

イーゴリはステップに兵をすすめる。彼の心にあるものは戦いにおける勝利のみである。彼はもはや何の感傷もない。戦場での侯の典型を作者はイーゴリの弟フセーヴォロトのなかに見ている。

《怒れる牛フセーヴォロトよ。汝はいくさの野に立ちはだかって敵軍に矢を射かけ、鋼の剣を敵のかぶとに打ちひびかせる。黄金づくりのかぶとをきらめかせつつかの牛が駆けゆくところ、かならず邪教徒ポーロヴェツのこうべが横たわった。……兄弟よ、フセーヴォロトは敵を討ちつつ、名誉も富もチェルニゴフなる父の玉座も、おのがいとしの妻うるわしきグレーボヴナのあつき情けとやさしき心も忘れ果てた。》(p.13~14)

最初の勝利から悲惨な敗北にいたるまでロシア軍は力をつくして戦う。

《一日は戦いに暮れ、つぎの日も戦った。三日目の昼ちかくイーゴリ軍の旗は落ちた。ふたりの兄弟は

1) *ibid.* стр.232; 「ロシア年代記」 478~479 ページ。

2) *ibid.* стр.233; 「ロシア年代記」 同所。

3) Гудзний, Н. ред. : *Хрестоматия по древнерусской литературе XI~XVII веков*, М., 1955<sup>6</sup>, стр.78.

流れ早きカヤリィの岸辺で別れた。血の酒は足らず、勇ましきルーシの兵たちはうたげをおえた。》

(p.18)

イーゴリは捕えられる。「イーゴリ遠征物語」はここで一旦イーゴリについて語ることをやめる。作者はキーエフのスヴァトスラフ大侯のみる不思議な夢を述べ、ついでロシヤ諸侯にたいして力づよい団結への呼びかけをおこない、イーゴリの妻ヤロスラーヴナの嘆きと祈りをうたう。「遠征物語」はキーエフ年代記のようにポーロヴェツの地における捕われのイーゴリの生活にすこしもふれていない。戦い、やぶれ、捕えられたイーゴリは、こんどは敵地からの脱出者として描かれる。

《イーゴリは眠り、イーゴリは目ざめ、イーゴリは心のうちでおしはかる、大いなるドンより小さきドネツまでの野を、夜半に馬はととのえられ、オヴルールは川むこうより口笛を鳴らして侯に時きたるを知らせる。……イーゴリ侯はてんのごとく葦にかけより、白きかもとなって水の上を飛ぶ。……イーゴリが鷹のごとく天かけたなら、オヴルールはつめたき露をふり落しつつ狼のごとく地をかけた。ふたりはかくて脚速きおのが馬を乗りつぶしてしまった。》(p.40~41)

イーゴリはロシヤに戻る。そこでロシヤには喜びがよみがえる。「イーゴリ遠征物語」はここで終わっている。

この作品はこのように一貫してイーゴリの行動を描いている。作者は年代記作者とはことなり、キリスト教徒イーゴリの心のうごきには興味をもたないかのようである。作者の関心はイーゴリにおいては肯定・否定のいずれの面からも、もっぱら武将としての行動に向けられている。彼にとって真実はただ行動のなかにあったのだ。

その名のつたわらぬ「遠征物語」の作者はイーゴリの従士ともいわれ、<sup>1)</sup> この遠征ののち2、3年のうちにこの作品を書いたと考えられているが、<sup>2)</sup> キリスト教にたいする無関心はおどろくべきものがある。唯一の伝来写本たる16世紀の手書本の末尾にみられるアメンという語も後世の挿入という説がある。<sup>3)</sup> 作品を通じて「キリスト教徒」という語は一度、「神」は二度あらわれるにすぎない。名誉と栄光がロシヤの将兵の中心概念である。作者が異教の信者であったとは思われないが、この作品にみなぎるいわば没宗教性は行動の文字という「遠征物語」の性格に由来するものであろう。作者のこのような自由な態度はかれの社会的身分を暗示しているように思われる。この型の文学はキリスト教以前からのロシヤの文学的伝統とキリスト教的ビザンツ文化の総合の新しい成果であり、この作品がその最も完成された代表的作品であると私は考えている。

12世紀のロシヤは諸侯間の紛争と遊牧民の侵入・掠奪に終始した時代であった。諸侯の利害関係は錯綜し、

- 
- 1) 作者を修道僧とする説、吟遊詩人とする説、ギリシア人とする説など数多くの臆測がおこなわれた。今日の支配的な意見はこの遠征に加わったイーゴリの親兵のひとり、あるいはかれの従兄キーエフ大侯スヴァトスラフの親兵とする。
  - 2) やはり多くの異説があるが一般には1187年の成立とされる。
  - 3) この語を復元テキストから除外している研究者が多い。R. Poggioli, *Cantare della gesta di Igor*, Einaudi, 1954, p. 1954, p. 196 (R. Jakobson のテキスト), p. 208 (同注); R. Nahtigal, *Starorusski ep. Slovo o polku Igorévě*, Ljubljana, 1954, p. 60.

それは外敵たる遊牧民と彼らの姻戚関係によってますます複雑化した。12世紀全体をほぼおおっているキーエフ年代記は年ごとに大小の戦闘の記事をふくみ、原初年代記にしばしばみられるように《何事もなかった》とか《平穏であった》と記入されたことが一度もなかった。この混乱と動揺の時期にあって、ひとりの平凡な侯が《ルーシの地のため》(p. 5, 18, 30<sup>2</sup>, 33) ステップにおもむいた事実の意義を正しくみとめ、それを文学までにたかめることは容易なことではなかったにちがいない。すくなくともそれは年代記作者の狭隘な視界にとらわれなかった作者によってはじめて可能であった。

作者はここで単に事実を羅列しているのではない。これは年代記や聖者伝にみられる観念的な冗漫さや実体描写のラコニズムからこの作品を峻別している点である。かれは行動するイーゴリを時間的にも空間的にも雄大なスケールの背景のなかに据えている。作品の冒頭において11世紀のロシアのすぐれた侯たちが言及され、またステップではげしい戦闘の描写のさなかに、かつて主人公の祖父オレークがひきおこした諸侯の内紛が想起され、不思議な術をもつとされるフェースラフ侯の神出鬼没ぶりが描かれる。イーゴリの遠征は作者の非凡な「時間の遠近法」によってつよく印象づけられている。

「イーゴリ遠征物語」の人間像のもうひとつの特徴は作者が主人公を全く理想化していない点である。かれは、同時代の年代記作者とことなり——彼らは聖者あるいは背徳者のカテゴリーイしかもたなかった——、イーゴリをきびしくつきはなしている。作品の素材の選択にあたり作者の意識がいかにはたいたかをせんざくすることは不可能である。しかし、もしかかれがもっと強力な侯による大規模な遠征の勝利をうたったとしたならば、すくなくともこの作品にみなぎっている悲壮な緊迫感を描き出すことができなかつたにちがいない。かれはその場合主人公のつよい個性に圧倒され、それを偶像化するか、あるいは全く客観的に記録するかの危険にさらされることをおそれていたのかもしれない。「イーゴリ遠征物語」で作者が主人公の頌歌をうたおうとしている、とするC. パウラの見解<sup>1)</sup>は正しくない。作者はここでキーエフ大侯に無断でステップに出兵した主人公にたいする非難をかくさず、しかもイーゴリと同時代の、そして彼よりはるかに強力な侯をそれなりにみとめていることのなかに最も端的にあらわれている。

《……このときドイツ人もヴェネツィヤ人も、ギリシア人もモラヴィヤ人も、ポーロヴェツの川なるカヤリの川底にルーシの富を沈め、黄金をまきちらしたイーゴリをのしった。》(p. 22)

主人公にたいする作者の共感が自然なかたちで読者に印象づけられるのも、イーゴリが理想化されていないためである。戦いの庭に勲を求めてステップに出陣したイーゴリがポーロヴェツに捕えられたとき、作者はロシアの有力な諸侯の名をひとりひとりあげて、その名誉をたたえつつ、次のようにうたえずにはいられない。

《侯よ、黄金のあぶみに足ふみ入れよ。このたびの恥をすすぐため、ルーシの地のため、スヴァトスラフのたけき子イーゴリの傷にむくいるために。》(p. 29~30)

この呼びかけは再三繰り返される。

作者と主人公のあいだの親近さは「ザドンシチナ」とくらべてみても容易に理解される。この作品は14世紀の末モスクワ侯国のヴラデーミル侯がドン河畔でママイ汗のひきいるキプチャク汗国の大軍をやぶって勝利をおさめた戦いをうたったものである。個々の語句や構成の点でほとんど「イーゴリ遠征物語」のパロデ

1) Bowra, C. M. : *Heroic Poetry*, Oxford, 1952, p. 19.

イともいいうるほどよく似かよったものであるが、ここではもはや主人公はつねに「ドミートリイ・イヴァーノヴィチ大侯」と呼ばれている。<sup>1)</sup> 彼は他の諸侯にたいして「主君」である。これは一面からみれば、封建的な身分関係の固定化を反映するものであろう。すなわちここでは主人公はひとりかけはなれた場所に立っている。一方キーエフ・ルーシにおいてはキーエフ大侯といえどもなお諸侯のなかでは「同輩中の第一人者」あるいは「父」であり、諸侯は彼の封臣ではない。「イーゴリ遠征物語」がそれを典型的に示している。この作品においてイーゴリは28回言及されるが、そのうち「イーゴリ侯」と呼ばれるのが9回。<sup>2)</sup> 「スヴァトストラヴィチ」の父称づきで呼ばれること2回、他はすべて呼びすてである。「イーゴリ・スヴァトストラヴィチ侯」という呼称は一度もあらわれない。弟のフセヴォロトにいたっては、その名が6回あらわれるうち「侯」をつけて呼ばれることは一度もない。「イーゴリ遠征物語」はすぐれて《叙事詩的な時代》の作品であった。

イーゴリがポーロヴェツの地をのがれるさい、自然はさまざまなかたちで彼の脱出を助ける。自然の擬人化はロシアの民衆のあいだにつたわる伝統的な手法であるが、ここにもわれわれは主人公にたいする作者のしたしい感情を見出す。

《ドネーツ〔河〕は言った。「イーゴリ侯よ、汝に大いなるほまれあれ。しかしコンチャークには惜しき、ルーシの地には喜びがあるように。」イーゴリは言った。「おお、ドネーツよ。汝にも大いなる喜びあれ。汝は波の上に侯を乗せ、侯のために白銀の岸に草をしきつめ、緑の木かげであたたかいもやを着せたのだから、水の上ではほほじろがも、流れの上ではかめとなり、風のなかではかめとなって汝は侯を守ったのだ。」》(p. 41~42)

「イーゴリ遠征物語」はあるときは簡潔に、あるときは修辭的な技巧をもちいて、行動する主人公イーゴリの姿を親しみの念をもって描いている。しかしなおこの作品でイーゴリの間人像を一途に追い求める読者は失望せざるをえない。その原因のひとつは戦場での主人公の武勇がつい一度も語られないためである。それはむしろキーエフ年代記によってはるかにくわしく知ることができる。実さい、年代記作者が戦闘の詳細な経過にたいして示している異様な執着にくらべ、この点にかんする「遠征物語」の作者の無頓着さは奇異の感をいだかせるほどである。結局、この作品のなかにわれわれは特に傑出した武將の姿を見ないのである。

多くの叙事詩は何らかの点で人間の理想を具現化した主人公をうたっている。ほとんどの場合その主人公は多少なりとも過去の時代からえらばれる。「イーゴリ遠征物語」はいずれの点においてもそれらの叙事詩とはことなっている。そしてそれは理由のあることであった。

1) このことは、おなじ戦闘を素材にした「ドン」の激戦の物語」、「ママイ戦記」についても、もちろん言いうる。

2) この論文を書いている最中、ジュネーヴの研究者ソロヴィヨフがおなじ計算をしていることを知った。かれはイーゴリが18回呼びすてにされていると述べているが、これは19回の誤りであろう。

Soloviev, A. : Автор «Задонщины» и его политические идеи, *Труды отдела древнерусской литературы* XIV, 1958, стр. 194.

## II もうひとつの人間像

「イーゴリ遠征物語」において作者がみずから課したのはイーゴリの人間像を描くことではなかった。もしかれがイーゴリ個人の運命に最も深い関心を寄せていたとしたら、年代記のように（そしてかれよりも700年のちの作曲家ボロヂーンのように）、ポーロヴェツの地における捕われのイーゴリの生活にもふれなはずがない。この作品は侯のロシア帰還後に成立したものであるから、当然作者はイーゴリ自身の口からステップでのかれの生活を聞かされていたことであろう。作者はまたこの作品でイーゴリ指揮下のロシア軍の武勲をたたえようと考えたのでもなかった。これはロシア軍の完全な敗北におわった遠征であり、ロシア方の4人の侯はいずれも敵に捕われてしまったからである。しかもこの遠征の前後には一度ならずロシア軍がはなばなし勝利をおさめた遠征があったのである。

年代記の作者は何よりも生起した事実を、事実そのものとして記録した（もちろん、全く機械的ではないが）。「遠征物語」の作者はそのような義務は感じなかった。かれには遠征の事実より遠征の理念のほうが問題であった。この相違のゆえに一方は文学になり、一方は歴史記録にとどまったのである。

読者は「イーゴリ遠征物語」のなかに主人公イーゴリをおおうさらに大なるもののかげをたえず意識せずにはいられない。作者もそれをかくそうとはしない、それは「ルーンの地」である。

作者がイーゴリの遠征を描く価値のあるものと感じたのは、それが「ルーンの地」を外敵の侵入から守ることと結びついていたからにほかならない。したがって、そこで主人公は宗教的な思索にふけるよりも、行動的にならざるを得なかった。また「ルーンの地」が作者にとって最大の関心事であり、かれの理想であったがために、イーゴリは理想化されるはずがない。

「ルーンの地」ということばはこの作品のなかに20回あらわれる。このことばは文脈的にいって、当時のロシアにすでにある種の国民的な意識が発生していたことを示している。まして作者は冷静にものを見ることのできた人間である。かれは年代記作者のように、《神はいま善からぬことをなしつつあるわれらを見て、われらが未来の世において否応なしに恵みを受けるようにと、われらに戦争と悲しみを送ったのである》<sup>1)</sup>などと考えることはできなかった。かれは歴史の重苦しい歩みを不安の念をもってみまもっていた。しかもそのために絶望したり、虚無感におち入ることはない。かれはひとりの平凡な侯のポーロヴェツ遠征をとらえ、それを芸術的に形象化しつつ、自分の政治的信念を吐露した。もちろん、いうまでもなく愛国心と名づけられるエゴイズムにしてもそのみで文学作品の価値を決定しうる情念ではない。「イーゴリ遠征物語」の高揚した文体をささえる精神の深さ、その真実性が問題なのである。この精神が詩人としての作品のすぐれた資質と結びついたとき——それは古代ロシア文学における新しい頂点がきわめられたことを意味する。

作者はみずからを詩人としてつよく自覚している。作品の冒頭で《神の智恵もフボヤーン》(p. 2)をたたえながらも、

《この歌はボヤーンの流儀にならわず、今の世にありしがままに始めねばならぬ。》(p.1~2)

とうたっていることからその自信のほどがうかがわれる。作品全体が12世紀末の卓越した詩人、情熱的な理想家の姿を提示する。

われわれは「イーゴリ遠征物語」のなかに主人公以上にさらに興味ある作者の人間像を読みとるのである。  
(1961.3.15)

1) В. Лебедев, *op. cit.* стр. 88; ロシア年代記, 169 ページ.